**受難節第４主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年３月10日**

**「神に栄光を帰す」**

**ヨブ記42章1～6節**

 **42:1 ヨブは主に答えて言った。**

 **42:2 あなたは全能であり／御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。**

 **42:3 「これは何者か。知識もないのに／神の経綸を隠そうとするとは。」そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた／驚くべき御業をあげつらっておりました。**

 **42:4 「聞け、わたしが話す。お前に尋ねる、わたしに答えてみよ。」**

 **42:5 あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。**

 **42:6 それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し／自分を退け、悔い改めます。**

**使徒言行録12章20～25節**

 **12:20 ヘロデ王は、ティルスとシドンの住民にひどく腹を立てていた。そこで、住民たちはそろって王を訪ね、その侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたからである。**

 **12:21 定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、**

 **12:22 集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。**

 **12:23するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた**

**12:24 神の言葉はますます栄え、広がって行った。**

 **12:25 バルナバとサウロはエルサレムのための任務を果たし、マルコと呼ばれるヨハネを連れて帰って行った。**

**物事が順調に進んだときや何か大きなことを成し遂げてそれが上手くいったとき私たちは嬉しく思います。そしてそのことが人から良い評価を得たときにはなお嬉しいものです。「〇〇さんはすばらしい」そう言われて悪い気がする人はいないと思います。反対に、当然良い評価が得られると予測していたのにそうでなかったときは、気分を害してしまうものです。例えば家族のために腕によりをかけておいしいご馳走を作ったとします。「今日は豪勢だね」とか「おいしいね」と当然言ってもらえると期待していたのに、誰も何も言わずにもくもくと食べているとやはりいい気はしないものです。**

**私たちは誰しもが良い評価をされたいという思いを持っています。けなされるよりは褒められる方が気持ちいいのです。ただ、そこを気をつけないと自分は良い評価をされて当たり前という思いが、だんだんと自分を誇る思いになってしまうのです。自分は料理が得意だからと自分の腕前を誇ることが、自分でこの腕前を得た、自分の努力で料理が得意になったと自分を誇ることに繋がってしまって、大切なことを忘れてしまうのです。**

**「ヘロデ王は、ティルスとシドンの住民にひどく腹を立てていた」(20節)と今日の箇所は非常に唐突に始まります。ここだけ読めばなぜヘロデ王が怒っているのか、さらにはティルスとシドンの住民がなぜヘロデ王に和解を申し出る必要があるのかもわかりません。**

**このティルスとシドンというのはフェニキアという国の都市で、地中海の沿岸にある街です。昔からイスラエルとは交流があり、ダビデがイスラエルとユダの王になった時、ティルスの王はレバノン杉といった資材と石工・木工といったいわゆる大工をダビデの元に送ってダビデの王宮を建てました。さらにソロモンが神殿の建設をした時にもティルスの王は協力をしました。するとソロモンはティルスに食料を送りました。そうした友好関係があり、ティルスもシドンもイスラエルから食料を輸入しており、その貿易関係がずっと続いていたようです。**

**しかし、どういった事情があるのかはわかりませんが、ヘロデ王は非常に腹を立てて、ティルスとシドンとの貿易をストップしたのです。今でいう経済制裁のようなものです。それは、ティルスとシドンにとって死活問題です。ですから、ティルスとシドンの住民たちはヘロデの侍従ブラストに取り入って和解を願い出て、その結果、和解の調停の式典が開かれることになったのです。その和解の式典の日が21節にある「定められた日」で、その和解の式典の日にこの出来事が起こりました。**

**ヘロデが王の服を着て座について演説を始めました。その時の様子をユダヤ人の歴史家ヨセフスも『ユダヤ古代史』という書物の中で記してあります。それによれば、ヘロデ王は、銀の糸だけで織られたすばらしい布地の衣装を身に着けていたため、朝日に映えて照り輝き、それを見た人々が畏敬の念を覚え、「ああ神なるお方よ」と呼びかけたと記されています。**

**「ああ、神なるお方よ」人を称賛するのにこれ以上の言葉があるでしょうか。聖書にはヘロデの演説を聞いていた人たちは「神の声だ！人間の声ではない！」と叫び続けたとあります。語っているのはヘロデなのでヘロデの声であり、まぎれもなく人間の声なのですが、人々は「神の声だ！」と叫ぶのです。これを叫んでいるのはティルスとシドンの住民でしょう。経済制裁を解除してくれて貿易を再開してくれたヘロデ王をよいしょしてもちあげることで彼のご機嫌を取ろうという思いからこの叫びをあげました。「神の声だ！ヘロデ王は神だ！」熱狂的にそう褒め称えられると調子に乗ってしまうものです。ヘロデはすっかり有頂天になったのです。まるで自分の力で世界の貿易を支配し経済を回しているのはこの私だ、私がいないと世界は回らないのだとばかりに何もかもを自分の力で成し遂げたように。そして今こそ私は正当な当然の評価を得ているのだと自分を誇り、おごり高ぶりの思いで満ちていたのです。**

**すると、主の天使がヘロデを打ち倒します。憐れにもヘロデは蛆虫に食い荒らされるという非常にみじめな最期を遂げたのでした。教会を迫害し、ヤコブを殺害し、ペトロを捕え、ペトロには逃げられましたが、これからも教会を迫害し続け、さらに名声を高めようとの野心に満ちていたであろうヘロデは神様に打たれて息を引き取ったのです。**

**23節にはなぜヘロデ王が神様に打たれて殺されたのか理由が記されてあります。「するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。」**

**「神様に栄光を帰さなかった」ので神様はヘロデを打ったというのです。神様に栄光を帰さないヘロデです。このヘロデはいったい誰に栄光を帰したのでしょうか。**

**それは自分にです。自分自身に栄光を帰したのです。全てが自分の功績であり、自分を誇り、自分の力で何もかもできると思ったのです。神々しい衣装に身を包み、「神の声だ。人間の声ではない」とのあからさまなよいしょの称賛を否定することなく受け入れて有頂天となってしまったのです。それはつまり彼は自分を神としてしまったのです。**

**神に栄光を帰さず自分に栄光を帰すとは、自分を神とすることです。自分こそが全地全能の神であるかのように思いあがってしまうことです。「わたしをおいて他に神があってはならない」と父なる神様はいわれます。神はただお一人です。その神以外のものを神とすることを神様はもっともお嫌いになるのです。ましてや神の被造物にすぎない私たち人間が、思いあがって自分を神としてしまうことを神様は最も嫌われるのであります。**

**そして、神に栄光を帰さずに自分に栄光を帰す、つまり自分を神としてしまうというのは私たちが最も陥りやすい罪ということができるのです。では、私たちはどうすればいいのでしょうか。それは何よりもイエス様の十字架の贖いによって罪が赦されていることを信じてその愛に感謝を持って歩むことが大切なのです。そして、そのイエス様の十字架の愛によって生かされている私たちは、そして教会はどのように歩むことが神様に喜ばれることなのでしょうか。**

**それが神に栄光を帰す歩みをするということなのです。私たちそして教会が自分に栄光を帰すのではなくて神に栄光を帰す歩みをするのです。それが大切であると今日の御言葉は私たちに語ります。ではそれは具体的にはどのように歩めばいいのでしょうか。そのことが24節と25節に記されているのです。**

**「12:24 神の言葉はますます栄え、広がって行った。**

 **12:25 バルナバとサウロはエルサレムのための任務を果たし、マルコと呼ばれるヨハネを連れて帰って行った。」これは一見すると単なるまとめの文章に思えるかもしれませんが、私たちが神に栄光を帰す歩みがどういう歩みなのかが記されているのです。**

**11：27以降にエルサレム教会のために生まれたばかりのアンティオキア教会が援助の品を、具体的には献金を募ってそれをバルナバとサウロに託してエルサレム教会の長老に届けたことが記されています。そして今日の箇所ではバルナバとサウロはその大切な任務を果たして、マルコと呼ばれるヨハネをアンティオキア教会に連れ帰ったことが記されてあります。バルナバとサウロがエルサレムにどのくらい滞在したのか、エルサレムの教会がバルナバとサウロが託された献金を受け取ってどんな反応をしたのかは一切記されてありません。ただ任務を果たしたとしか記されていないのです。この「任務」と訳されている言葉は元の言葉では「奉仕」を意味する「ディアコニア」という言葉です。私たちが教会でなし、またそれぞれの場所で神様のために喜びをもって行う奉仕のことです。**

**アンティオキア教会が喜びをもってエルサレム教会に仕え、それは自分たちの栄光のためにではなく、神様の栄光のためにお捧げした献金をバルナバとサウロもまた自分たちを誇るためでなく神様が誇られ神様が褒めたたえられるためだけにその託された献金をお届けしたのです。感謝と喜びの奉仕の業として、ただ神様のために奉仕の業を果たしたのです。バルナバもサウロもエルサレム教会からさぞかし喜ばれたでしょう。でも、もしそこでこれが自分たちの手柄と思ってしまってエルサレム教会の評価を求めたとしたらヘロデ王と同じことをしてしまうのです。褒めたたえられるのはただ神のみ、ただ神に栄光あれ、その謙虚な思いで献金を届けるその奉仕の業を通して神様が褒めたたえられるのを望みまたそのことを喜んだのです。ただたた神様にお仕えし、教会にお仕えし、神様に用いられて、神様が褒めたたえられる喜びをバルナバもサウロもエルサレム教会も共に分かち合ったのです。そしてバルナバとサウロはさらに神様の奉仕に用いられるためにマルコと呼ばれるヨハネをアンティオキアに連れて帰ったのです。その結果として神様の言葉がますます栄え、広がっていくのです。この後13章からパウロのいわゆる伝道旅行のことが記されています。アンティオキアから異邦人の街にさらに神様の言葉が栄えていき、広がっていくのです。**

**私たちが神に栄光を帰す歩みをする、それはバルナバやサウロやアンティオキア教会やエルサレム教会が歩んだように、何よりも神様を神様とすることを第一とし、褒めたたえられるのはただ神のみ、ただ神に栄光あれ、その思いを持って感謝と喜びの奉仕の業に励んでいくことなのです。神様を礼拝して、ただただ神様にお仕えし、教会にお仕えし、また隣人にお仕えして、私たちの奉仕の業を通して神様が褒めたたえられるのを望むのです。そして奉仕ができることを共に喜ぶのです。**

**奉仕は喜びの業です。感謝の業です。こんな弱く小さな私を神様は愛して下さり豊かに用いて下さり、この私の小さな奉仕の業を通して神様が褒めたたえられるのです。奉仕は神様の御栄えが表される愛の業なのです。だからこそ教会に神様の愛が満ちていくのです。**

**ただ神にのみ栄光あれ！これからも神様に栄光を帰す歩みを感謝と喜びをもってなしていきましょう。**